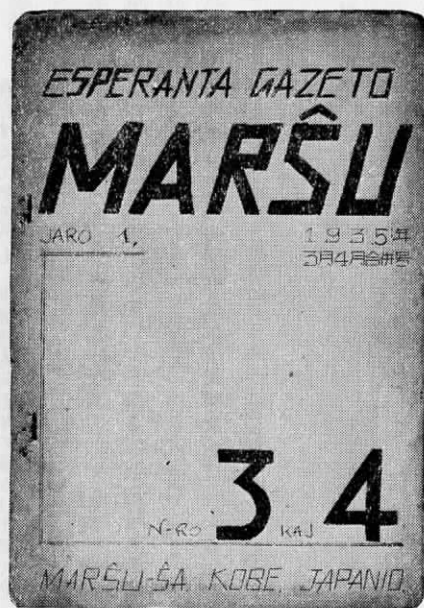


ペランチストであるが、そのエスペラント活動については、われわれは何も知らぬ。刊行中の著作集の中から、なにかタネが出てくることを期待している。

注

- 1 『プロレタ・エスペランティスト』 第一号 一九三二年三月。
- 2 比嘉春潮『沖繩の歳月』一九六九年 中公新書。
- 3 『プロレタ・エスペランティスト』一九三二年八月号。
- 4 『討論 日本プロレタリア文学運動史』一九五五年 三一書房。
- 5 『ボエウ』第一卷第一号 一九三三年。
- 6 坂井松太郎『私のエスペラント運動史』Nova Rondo 二二号 一九六八年。
- 7 『思想月報』第二〇号 一九三六年二月。
- 8 司法省刑事局『プロレタリア・エスペラント運動に付て』一九三九年。
- 9 Nova Rondo 二七号 一九七四年五月。
- 10 『赤旗』一九三二年十月二十日号。
- 11 山田六左衛門『全協時代の思い出』一九七〇年 山六会。
- 12 内務省警保局『昭和六年度に於ける社会運動の状況』。
- 13 『赤旗』9と同じ。
- 14 羽仁五郎『ナショナリズムについて』(竹内好・横西光速との対談)『思想』一九六四年三月号、のち論集『現代とは何か』一九六九年 日本評論社。
- 15 以下の記述は、井野川潔・森谷清・柿沼肇編『嵐の中の教育』一九七一年 新日本出版社、増淵譲『日本教育労働運動小史』一九七二年 新樹出版、池田種生『プロレタリア教育の足跡』一九七一年 新樹出版などによるところが多い。
- 16 浅野研真訳『新興教育学』刀江書院 一九三一年。
- 17 グロレタリア科学研究所資料部『資料月報』一九三二年、六・七月合併号および八・九月合併号。
- 18 岡本好次『浅野研真氏を偲ぶ』La Revuo Ojento 一九三九年十月号。
- 19 新興教育研究所ソヴェート教育研究会『ソヴェート同盟に於ける文化革命』一九三一年 叢文閣。



『マルシュ』

エスベラント運動は、人間があり、社会があるかぎり、存在するであろうし、世界語も何百年の後かは不明であるが、出現するであろう。

中塚 吉次

弾圧に抗して——当時の共産党

数ある左翼文化団体のうちでも、ポエウ（日本プロレタリア・エスベラントスト同盟）はプロ科（プロレタリア科学同盟）とともに、一九三四年九月、その最後の書記長岩場正三が検挙されて「玉砕」する最後まで生き残る特殊な姿を見せた。それはコップ（日本プロレタリア文化連盟）最後の党フラクション川内唯彦が同年五月、立川幹一・岡本威が同年八月に検挙されて、コップそのものが潰滅する時期まで存在していたことになる。かつて伊東三郎を指導者としていた全農全国会議派フラクションの宮内勇らが日本消費組合連盟のフラクション山本秋らとともに、「コミンテルンの承認を得た中央委員の最後のひとり」^{〔1〕}袴田里見の指導に疑問を持ち、党中央奪還全国代表者会議準備委員会、いわゆる「多数派」を結成し、また、労働組合全国協議会の中央部にいた小高保・田中一郎・浜田善盛らが党中央部と抗争をはじめたときも、ポエウ指導部の党中央への信頼はみじんも揺るがなかったのであった。

作家・美術家・演劇者たちの団体、またソヴェート友の会などの数多くの文化団体が、治安維持法の適用を前にして自発的解散をしてみた中で、ポエウが最後まで残りをえた秘密はどこにあるのだろうか？「工場農村にガッチリと根をおろしていた」からであろうか？ちがう！その反対に、工場農村に組織を持たず、文化運動本来の使命を放棄して、ミニ政治団体化していたがゆえに、また、その結果として、専門家的知識・能力を持たずしても容易に幹部になり得る性格のゆえに、最後まで

生き残ることができたのであった。

もともと最盛期の一九三二年十二月末でも、内務省調査によれば、同盟員二三六という小団体、しかもその実体はこの種の文獻の常として相当の水増しを考えねばならぬミニ、いや、ミクロ団体であった。その上、この二三名のうち、専門家として数えられる者はせいぜい一〇名前後で、圧倒的多数が初心者であり、文学・演劇・科学団体などと比べると、月とスッポンのようなものであった。もしも治安維持法がなくて共産党がこの国でも合法性を持っておれば、二三六名の大部分はこの運動に入ってこなかったはずであった。共産党その他の革命的団体の大部分が地上に姿を見せていないために、それらへの窓口としての役割が、ポエウのみならず、全左翼文化団体の、全部と言っては過言であるが、大部分を占めていたのである。蔵原惟人が提案し、スバイ松村を中央に抱えた風間文吉以下の党中央委員会がとったコップ結成の動きが、こうした便宜主義の支配によるものと断言すれば、早計にすぎないだろうか。左翼分子を十パーカラゲに当局へ献上するような文化政策、しかも、合法性を持った国々の労働組合の文化活動方針として、労働運動が非合法の国では適用すべきではないという断わり書きつきのプロフィンテルン第五回大会の決議にもとづく文化運動の中央組織結成のナゾは、便宜主義とスバイの挑発という要素をよそにしては考えられぬ。——もしも蔵原がロシア語の決議を早のみこみして提案し、あげくのはての騎虎の勢いによるものでないとすれば、という条件つきの仮説であるが。——そして、同時に、こうした方針に対して戦うどころか、無批判に追従したわれわれ自身の責任をも痛感する。

一九三四年の党中央、また多数派中央の潰滅のあと、革命運動の中心は関西に移っていた。多数派を支持する唯一の大組織であった党関西地方委員会は、多数派解体後も労働救援会大阪支部および東成診療所、大阪市電自助会、全国労働組合同盟港南支部連合会、全国評議会の一部などに基礎をおいており、三五年末から翌年にかけて、党中央再建準備委員会を作り、『赤旗』を再刊するにいたったのであった。岩村登志夫著『日本人民戦線運動史序説』の記述によれば、「官憲報告にしたがえば、それは一九三六年末までにすくなくとも在阪二三団体に延べ一一七人を組織するにいたった³⁾。念のために言うと、三・一五の大阪の党は、奈良・和歌山・香川・鳥取の党員を加えても一〇〇名未満であった。もっとも、これは質の問題を除外して考えてはならない数字である。経験で言えば、三・一五の方がケタがいにまさり、弾圧に抗する気迫では、この方がはるかに上であったと言えよう。

この党再建運動を背景にして、かつてポエウの大阪支部長としてかつがれていた小岩井淨は、内野壮児・佐和慶太郎・鈴木英雄・妹尾義郎・柳田春夫らとともに、加藤勘十・高野実・杉山元治郎らを語らい、合法的啓蒙雑誌『労働雑誌』を一九三五年二月から東京で出しはじめ、一方では立花敏男・加藤勘十・喜入虎太郎・岡田宗司・稲村順三らの協力を得て日本政治経済研究所を作って『大衆政治経済』を三六年十月に創刊した。ふたつの雑誌は全国に分局や取次所を作って人民戦線運動をささえるために働いた。とくに『労働雑誌』関西支局は、支局長川上貫一の戦後における活動で有名であるが、実質的な中心である岩間光男は四・一六に未成年で連座した人であった。

この『労働雑誌』『大衆政治経済』は、大竹博吉の『社会評論』『文学評論』、貴司山治の『文学案内』『詩人』、新井徹の『詩精神』、長谷川国雄の『時局新聞』、永島孝雄らの『学生評論』などとともに

に、全国的な配布網を持った人民戦線派のジャーナリズムを代表し、『ズドン』『土曜日』その他数多くのミニ雑誌が、文化団体の地方分散方針に応じて発生し、こうした運動をささえていた。「きょう棺を担う身が、あすまた担われる身であらう」と、山本宣治暗殺に抗議して江東の一労働者が雑誌『戦旗』に書いたが、このような決意をもって全国の有名無名の老若戦士たちが、すでに開始された第二次大戦に抗争すべく、破壊を覚悟して、その前に立ちふさがろうとしていたのであった。

わがエスپرانت運動もまたその一角にあった。神戸を中心としたこの時代のエスپرانت運動を、共産党の当時の状態と切り離して考えてはならない。

『マルシュ』の発足——運動の地方分散

一九三四年三月二十四日、中塚吉次を書記長とするポエウ神戸支部準備会は「ポエウよりの脱退にさいし、全国の革命的ならびに進歩的エスپرانتスト大衆に檄す」というアピールを発表して、その進退を明らかにした。ポエウ本部がエスپرانتと無縁の政治青年の小グループに転落して硬化現象を呈していることを痛撃し、エスپرانت運動にたちかえって、より広範な活動を展開することを誓ったのである。プロレタリア作家同盟書記長鹿地亘が、宮本顕治検挙直後に同盟解散の非常手段をとったことと同工異曲と言えるかも知れない。三・一五以前において、かつての大阪の最高指導者の

ひとり、そして解党派のチャンピオンでもあった村山藤四郎に教えを受け、その後も赤色救援会や全協の活動に参加したこともある中塚にとっては、ポエウ本部の青二才どものチーチーパッパに見きりをつけざるをえなかったものと思われる。

中塚は仲間の大倉輝雄・若松寿郎・上野淳・栗栖継・野田秀二らと、マルシュ社（「進め」社）をこの年九月（？）に作り、十月より雑誌 *Marshu* を謄写印刷で出しはじめた。全部で一一号しか出せなかったこの雑誌は、検察当局が伝えるかぎりでは、各号五〇部から二五〇部であったと言う。この発行部数は、より多くあらうとも、より少ないということはない。読者への波及を避けるために、こういう場合には極力部数を少なく「供述」するからである。この雑誌を通じて中塚が提起した「進歩的エスپرانتストの組織と活動」のあるべき姿は次のとおりであった。

「ポエウのごとき組織はわれわれの進歩的エス運動にはむかない。なぜならポエウはプロ・エス運動の組織であって、現在の情勢では合法的に存在し得ず、それ自身では進歩的エス運動のごとき大衆的なものとはなり得ないし、また非合法下にかかる組織を持つことは事実上不可能だからだ……以上の理由によって、われわれの選ぶ形は地方的分権制である。では具体的にはどうなるのか。簡単だ。現在全国に散らばっている同志がそれぞれの地方において、その地方に適当なやり方でグループを作っていけばよいのだ。ある地方では進歩的傾向をウソとハッキリさせた組織をもって堂々と中立ないし反動のグループに対抗してもよいであらうし、またある地方では中立組織内の一グループとして存在せねばならぬときもあるだろう。あるグループは単独に地方的機関誌を出して大

衆化を目ざすであらうし、またあるグループは学会系（中立）地方会の会報に自己の意見を發表することしかできないときもあるであらう。この組織はすこぶる屈伸性に富み、自由自在に使いわけなければならない。また地方組織と併行に、文学とか通信の全国的また地方的組織があつてよいわけだ。」

そして中塚は、こうした地方的組織の全国的指導の問題を考えて、中国エスペラント運動から学ぶことを提唱する。ここでは、各地に散在するエスペラント団体を実質的に指導しているのは、上海世界語者協会の機関紙 *La Mondo*（『世界』）であつた。『マルシュ』が日本の『モンド』になろう、万一『マルシュ』が発行不能に陥れば、他の地方機関誌が一時的に、または恒久的にとつてかわればいい。

これに対して、岡山の第六高等学校時代に大栗清実とともに三・一五事件にひかかり、その後も左翼労働組合運動に参加して投獄された米村健は、「プロ・エス運動と進歩的エス運動とはどちらがうのだ。同一のものを組織を分散して、圧迫をさけようとしてもダメだ」と批判したと言う。

事実、『マルシュ』の発足は、「プロレタリア」の代わりに「進歩的」と形容詞を変えた形で分散形態をとろうとしただけであつた。鹿地の作家同盟解散論は、分散だけではなく、作家同盟外の作家との協同行動を打ち出していたのであるが、エスペラントの場合では、その程度の基礎さえ持っていなかった。批判した米村にしても、現実の行動から判断されるかぎりでは、それ以上に出られなかった。後になって栗栖継が「ボエウ時代の残りがすを多分に存していたためとイーベ（プロレタリア・エスベ

ラント・インタナショナル）の方針を基調としたため大いなる発展を見ることができなかった」と、おそらく検察当局の前で自己批判しているのも、もつともであつた。

ともあれ、『マルシュ』は進みはじめた。それは疑うべからざるエスペラント団体であつて、ミニ政治団体ではなかつた。間もなく日本のプロ・エス運動の中心にすわつて、イーベ日本支部と名のらないだけで、実質上にはその役割を勤めるようになった。しかし、これは他の面から考えると、人民戦線の展開からますます遠ざかつただけである。

『マルシュ』に集まつた者は、当局側文書の示す上記の面々だけではなかつた。といつて広範囲のエスペラントを結集し得たわけでもない。神戸、上筒井の消費組合（創設者のひとり、小林とみも古くエスペラントをかじつた人である）に集まつた中には、久留島義忠のように、獄中でエスペラントを習ってきた人びともいた。野間宏の小説『青年の環』に出てくる、理想化されすぎている革命家矢野元治の造型に若干の貢献をしている矢野笹雄も『マルシュ』の周辺にいたひとりである。久留島は「すぐれたエスペラント」の集まりであつたと書いているが、そればかりだったとすれば、せっかくの中塚の意図も流産したことになろう。

紙面で見られるかぎり、『マルシュ』は高級エスペラント雑誌ではなかつた。それは、日本エスペラント学会の雑誌とちがつて、ショロホフの小説『開かれた処女地』などを教材に使い、各国の労働者の生活を国際文通によって紹介したものであつた。別冊付録とした *Nia Vivo*（『私たちの生活』）によって日本の労働者の生活と労働の断面を国外の労働者に知らせた。

かれらはこの国際通信の成果を『労働雑誌』その他に持ちこんだ。おりからのスペイン内乱にさいして人民戦線軍を助けることを訴えた。またコルチンスキー（スターリンに殺された）訳のディミトロフの人民戦線運動のテーゼを入手もした。このグループのひとりであり、『マルシュ』の国際通信面の活動をひとりで背負った感さもある栗栖が最近書いたところによると、イギリスのエスペランチストの協力で、コミンテルンの機関誌『インプレコール』を入手して、これを共産党中央再建委員会準備会に供給していたと言う。それを再刊『赤旗』のために訳していたのは、これもエスペラントをかじった山辺健太郎であったと⁽⁸⁾か。

岡山から『マルシュ』に呼応したのは、旧ボエウのメンバー久山専一郎であった。三四年十一月、戦後、島津製作所労組の幹部として新産別結成の中心になった西橋富彦と伊藤敏雄と三人でアミッコ社を作った。かれらは『マルシュ』がやらなかった、いや、できなかった社会大衆党への働きかけを行ない、全国水平社にも協力しようとした。スペイン人民戦線軍を支持するために金を集めた。また、アメリカで野坂参三が発行し、石垣綾子やカール・米田などが協力して日本へ⁽⁹⁾流しこんだ『インプレコール』の日本語版『国際通信』と連絡したと言う。アミッコ社の機関誌 *Amiko*（友人）⁽¹⁰⁾ は一六号、五〇部、一二〇部であった。「終始三人であった」と検察当局の文書は語っているが、これはおそらく「三人」の口が固かったことを示すものであろう。

大阪の活動の中心になったのは、宝木寛と林正之助であった。三五年九月から道頓堀の喫茶店「バ

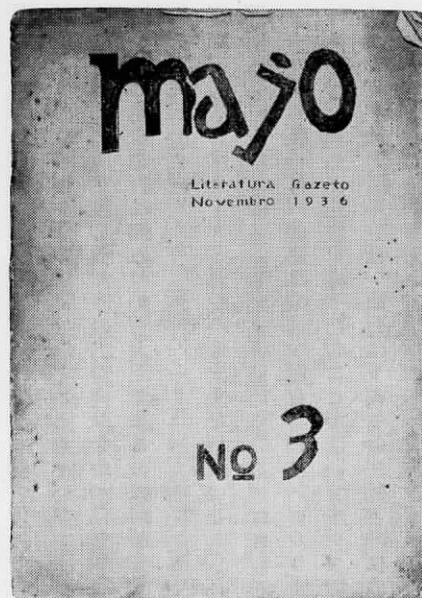
ザード」（この喫茶店はなぜか当時の左翼青年によく利用された）で少人数のサークル「ババゴ・ロンド」（オウム会）を作って、エスペラント会話をやっていた宝木たちは、三六年一月、中塚の働きかけにより改組してフライト社（兄弟社）を作った。これには宝木の兄、武則、植田昌三・植田武二・野上清・山本享二・坂井松太郎・坂上睦郎ら、同じように旧ボエウの残党たちが参加した。機関誌 *Flaite* は創刊号八〇部、第二号九〇部と言われているが、宝木寛は第三号を出せなかった。結核が昂進して刀根山病院へはいったのである。兄の武則が第三号を発行した。

『マルシュ』に共鳴して名古屋で運動を起こしたのは佐藤時郎である。中垣虎児郎のオイにあたる佐藤は、一九三二年ごろからエスペラントを習っていたが、三五年九月、名古屋で開かれた日本エスペラント大会——この大会の中心になったのは由比忠之進であった——に出席して、中塚と会見、組織活動をはじめた。同年十一月には、足立直次・立松芳夫・安井治雄・長谷川鉄之助とともに、ロンド・タギージョ（夜明けの会）を作り、翌年一月から三月まで初等講習会を開き、山田正男・角野真一らの参加を得て、ボボーロ社（人民社）を作って、機関誌 *Saluton*（今日は）⁽¹¹⁾を出しはじめた。創刊号四二部、終刊号になった第三号は二四二部と言う。角野真一の起訴状によれば、エスペラント訳のディミトロフ論文を角野と山田の協同で翻訳し、配布すること、社会大衆党に入党し、それを動かすこと、などを協議決定し、国際通信によって得たニュースを各団体に供給し、スペイン人民戦線応援のために三円九〇銭を送付したことがあげられている。ディミトロフ論文はおそらく訳されたなかったと思われる。当時の名古屋の労働運動は比較的活発であり、有名な三七年の愛知時計の争

議では、ある一戦場をほとんど全員、旧全協系のオルグが組織していたと記憶している。またその指導にあたったのも、尼崎で結成された春日庄次郎をキャップとする日本共産主義者団の幹部になった原全五であり、この時代のストライキの代表的なひとつである。ポポーロ社はこの地方の中心的指導者石川友左衛門らに経済的援助をし、左翼単独組合、名古屋合同と結びついていた。『マルシュ』の運動が文学青年的であったのに比べると、はるかに政治的であった。中塚が上京して、『マルシュ』が低調になったあと、中塚の期待どおりに、『サルートン』が全国の運動の中心になった。

大衆団体としての幅を持つ『マルシュ』の動きは、当然のこととして運動の中心にいるエスペラント専門家を満足させることのできない限界を持っていた。とくにエスペラント文学の確立を自己の最高使命と考えていた栗栖継において、やりきれない感じが強かったのではないか。後述の『エスペラント文学』のいき方に不満を持った栗栖は、中塚・野田と共に三五年五月、マヤー・ロンド（五月会）を作り、同年九月、その機関紙 *Mayo* を創刊した。米村健・岡一太・野上清がこれに応じ、ついで『マヨ』を米子の米村健の家、「エスペラントの家」に移し、あらためて第一号を発行し、第三号でつぶされるまで出した。『マルシュ』がイーペ日本支部の機能を果たしたのと同様に、『マヨ』はイアレヴ（国際革命エスペラント作家協会）の日本支部としての実体を持つにいたった。この団体は一九三一年に創立され、日本でも『戦後』その他の小説で知られており、当時はすでに国際旅団の一員としてスペイン戦争に参加していたドイツの作家ルードビヒ・レンを委員長とするもので、モルブ（国際革命作家同盟）のセクションとなっていた。検査されたときの「自供」によると、マヤー・ロン

ドの会員は、栗栖・米村・岡だけであり、いずれもイアレヴのメンバーになっていて、準メンバーと言うべきものは、野上清・坂井松太郎・大和庄祐・河口寿美子・長谷川テルであったと言われる。野上は元ポエウ大阪支部書記長、ゴルキーの「私はどうして学んだか」をこの時代『労働雑誌』に発表した人。坂井は元ポエウの書記長、執行猶予になって大阪へ転住していた。大和は四・一六の共産黨員、伊藤憲一とともに日本労働組合同盟の革命的反対派や共産青年同盟の組織で働いた紡績労働者で、鈴木清の小説『監房細胞』にもモデルとして登場する。エスペラントは獄中で学んだのである。河口については何も知らぬ。長谷川については後の章にゆずる。



マヤー・ロンドの機関誌『マヨ』

これらの団体のいずれもが、旧ポエウの政治的偏向に抗して、あくまでもエスペラント団体の性格を守るために努力したことは事実であるが、その根底にある思想は、依然として、「党その他革命団体のブルとしての文化団体」というところから遠く離れていなかった。また、それであるかぎり、当然のこととして、視界の狭さと呼んで、せっかくデイトミトロフ報告を読んでも、身体をもって理解することができ

なかった。もう一步進んで、自分たちのエスペラント団体をプロ・エスのわくから解放して、人道主義者・平和愛好者が圧倒的部分を占めるエスペラント運動の主流派、日本エスペラント学会の動きの中に全面的に身を投じるだけの力を持たなかったし、また反対の側でもそれを受け入れる度量を欠いていた。他の地方は知らぬが、大阪ではこの傾向が支配的であった。

そして、「ファシズムの攻勢により自由主義思想すらおびやかされている日本では、エスペラント運動、あるいはローマ字運動の合法性を利用¹²しようとしたのは、かつてアンチ（反帝国主義民族独立運動支持同盟）検挙に連座して名古屋の第八高等学校を追われた加藤隆通であった。

一九三六年一月、加藤は桑名・四日市のエスペラント会その他を組織して、桑名に本部をおく北勢エスペラント連盟を作った。ここでは『マルシュ』とちがって、左翼系エスペラント連盟だけではなく、学会系、中立系、またはブルジョア的と呼ばれていた人たちを糾合していた。加藤のエスペラント連盟としての実力が、地方にあつて大きくモノをいったものであろう。五井義雄らのいわゆるプチブルのエスペラント連盟が、福田正男や、今日陶芸家として一部に知られる神尾昇三らの左翼エスペラント連盟といっしょになった。かれらは回覧雑誌を作った。加藤はそこに、ソ同盟エスペラント運動の指導者ドレーゼンの『エスペラント運動史』の日本語訳や、山田勝次郎が『日本資本主義発達史講座』の月報に発表した「農村負債問題について」、『唯物論研究』の古在由重の論文「西田哲学の基本的性格」などのエスペラント訳を出して、その回覧雑誌の一部をのちに Juna Japanlando¹³（若い日本）なるパンフレットにまとめた。

加藤はさらに斉藤秀一の国際ローマ字クラブの協力者でもあり、一九三八年には、伊東三郎・加藤

孝一・市原梅喜および斉藤とともに「エスペラント文学友の会」を作ろうとして、回覧雑誌『明日のために』第一号の編集をして検挙されるにいたった。

『マルシュ』の活動は東京にも影響を及ぼした。内務省警保局の文書は次のようにその動きを報じている。¹³

「一 ルーマ・ロンド（明るい集い）ルーマ・ロンドは……昭和十年四月元『ボエウ』中心メンバーたりし高木弘事大島義夫の提唱に結成せられたるものなるが、その主なるメンバーは大島義夫・中垣虎児郎・樋口幸吉・泉茂雄・磯崎巖・長谷川てる・東宮豊守・中村三郎（いずれも元『ボエウ』メンバー）等二十名ぐらゐにして、……爾来昭和十一年二月までの間、東京市神田区駿河台上『宝亭』において毎月第一土曜日に研究会を開催し、プロレタリアエスペラントに関する理論的技術的研究を行いおりたるが、昭和十一年二月、二・二六事件により集会禁止のため、ついに中止するにいたりたり。

二 ルーモ会（光会）二・二六事件により集会禁止のため前記『ルーマ・ロンド』の中止のやむなきにいたるや、中垣虎児郎・大島義夫・中村三郎・長谷川てる等はこれにかわる非合法非公開の研究会を開催し……昭和十一年四月『ルーモ会』を結成し、爾来昭和十二年六月までの間、前記中垣・大島・樋口・長谷川・中村等は東京市杉並区高円寺四丁目中垣虎児郎方において、毎週土曜日ごとに研究会を開催し……エスペラント技術ならびにマルクス主義言語理論に関する相互の研究啓

もうを行い、また回覧誌を発行して……昭和十二年六月、指導者中垣虎児郎検挙のため解散せり。

三 ジェルモ会（芽の会） 昭和十年十一月ごろ東京市本郷区上富士前町三番地、元ポエウメンパー東宮豊守方において、東宮豊守・中村三郎は……グループ結成方につき協議したる結果、全永淳外二名の同志を獲得し、プロレタリアエスペラントグループ『ジェルモ会』を結成し、爾来昭和十一年一月までの間、前記東宮方において数回の理論および技術に関する研究会を開催し、また回覧誌『ジェルモ』を発行して相互の啓もうに従事したるが、東宮豊守の肺患悪化のため自然解消するにいたりたるものなり。

四 プロエス再建グループ 前記ジェルモ会解消後、東宮豊守・中村三郎等は一九三五年コミンテルン第七回大会において決定せる人民戦線運動の線に沿い、プロエス運動の再興を企図し……昭和十一年四月ごろ、『マルシュ』指導者中塚吉次が東京への移住を機とし、同人および堀見俊吉等と共に東京においてプロエスグループの結成を企図し、同年五月上旬、前記東宮豊守方において協議を行い……具体的方針を決定し、まず東京市内に散在せる『築地ロンド』『大井ロンド』『マルタ』『ピンチーロ』等のプロエスグループならびにプロレタリア文芸団体『ズドン』等と連絡し……東宮豊守の死亡、中塚吉次・堀見俊吉の検挙等のため挫折し、昭和十二年春ごろ自然消滅せり。

五 マルタロンド（三月会） 中垣虎児郎・中村三郎・賀川庸夫等プロレタリアエスペランティストが中心になり、下村信夫・森山稔・三石清・曾根原博利等進歩的同伴者のエスペランティストを糾合し『マルタロンド』を結成し、爾来昭和十五年七月までの間、東京市四谷区新宿白十字その他において、毎週一回ずつ研究会を催し……昭和十五年七月中心分子の検挙により潰滅せり。」

当局の文書によると、中村・東宮らは上海その他と連絡し、イーペやイギリス社会主義労働者エスベラント協会、スペインの人民戦線団体と連絡して機関誌を入手し、「また支那重慶にありて抗日運動に狂奔せる長谷川てるより文書の送付を受けた」ことになっている。

この中村・堀見らはさらに柴田鉄造・上原全男らとマルクス主義研究会を開いて、『反デューリング論』などを読んでいた。

近代文学館に『進歩』という雑誌が欠号だらけで保管されている。隅福寿という人を発行人として現代文化社から出たもので *La Progreso* という副題つきのものだが、どうしたのか、あれほどウの目タカの目の検察当局の目をのがれたのか、ブラックリストの中に見つからない。あるいは見落としかとも思うが、一九三四年六月に創刊されたもの。唯物論研究会の岡邦雄らが協力したと言う。この雑誌の三五年一月号（第一巻第八号）には、「農村は飢えている」という記事が「支那のエス語雑誌『世界』から」としてエス和对訳注つきで転載されている。同年四月号には「全人類は平和のために団結せよ」というザメンホフの演説と『マルシュ』から「ウクライナからの手紙」が、中垣の解説つきで転載されている。現代文化社といえ、たしか壺井繁治編の『古典文学の再認識』とかいう本を出したところだと思うが。この雑誌の文化運動史に占める地位を知りたい。

もう少し拙劣な動きをしたのは、京都プロ・エス研究会であった。一九三六年一月、共産党員細川三西が中心になって組織したこのグループは、河本吉衛・田中芳雄を指導者として、宮島宗三郎・平

野順一・岡谷元治・瀬野弘文・亀岡松子・石野光子・川崎トミらが『プロ・エス講座』をテキストとして研究会をやり、三六年十一月の検挙までに第三巻まで進んでいた。検察当局は細川がこのグループから党員を獲得することを目的としていたというが、細川らの戦後の動きをみれば、必ずしもコジツケばかりとは言えぬ。

こうした形での運動は地方に散在しており、監視の目をそそがれていた団体は、平出禾(幸徳事件の弁護人であり与謝野鉄幹門下の歌人で発禁小説『逆徒』の作家平出修の子である)がまとめた当局の極秘文書によると、

北海道 新世紀社 左翼分子一九名 井口陸平・大和庄祐・山川吉男・斉藤松雄(はじめの二人がエスペランティスト)

岐阜 エスペラント会 七名 清信重・浦野由市

柳井 エスペラント会 プロ・エス関係二〇名 広田伝・神田継治・浜田マツエ

さらに他の文書によると、少しさかのぼって、

ポエウ岡山支部 七名、旭川エスペラント会 武田威勢ら一〇名、ルーマ・ロンド 大島義夫・久保貞次郎ら二〇名(これについては前述のとおり)、宇部エスペラント同好会 笹井親敬ら一〇名などが「共産主義系文化団体」としてあげられており、さらに神山茂夫・神山利夫・寺田貢らの共産党再建運動に関連して、中台一郎・広瀬仁らが旧プロ・エス系グループとして検挙されている。

この当局の網の外にいた団体も数多いことは、筆者自身の経験として知っている。少し後のことに

なるが、京大ケルンの布施杜生・野間宏らのグループもあった。獄死した布施(布施辰治の子)をめぐる野間の小説『暗い絵』はこの時代を描いたものである。

『国際語研究』と『エスペラント文学』

一九三三年一月、大島は、いわゆるブルジョア・エスペラント運動の主流派に属する川崎直一、あるいは岡本好次らの協力を得て、雑誌『国際語研究』を謄写印刷で出しはじめた。それはほとんど日本語で書かれて——このあたりがこの運動の弱点でもあった——国際語、あるいはエスペラントが社会において占めるべき位置を理論づけるために働いた。それはポエウとの対比において考えると、プロレタリア科学同盟と唯物論研究会の関係に似ていた。時代の潮流を、必ずしも敗北と考えず、反省期、理論的再検討の時期ととらえたのである。本書の著者のひとりの活動をこのように評価するのは、いささかクスクグったいではあるが、事実においてはこのとおりであった。

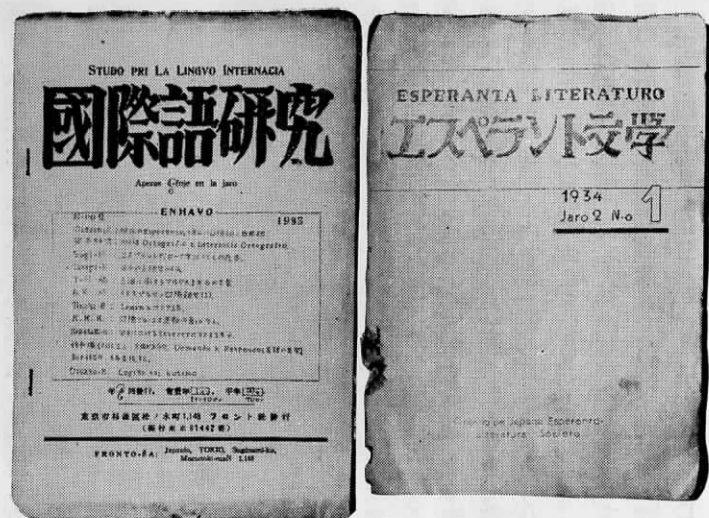
この『国際語研究』の仕事の中から大島の翻訳で、ドレーゼンの大著『世界語の歴史』の日本語訳ができた。スターリンの手でやがて倒される原著者のこの仕事は、大島のそれ以前の労作、やはりドレーゼン原著の『エスペラント運動史』、スピリドビッチ著『言語学と国際語』、それに少し遅れて出たブイコフスキー原著『ソヴェート言語学』などとともに、エスペラント運動に理論を与えるだけでなく、マルクス主義言語学の問題点を提出するものであった。ただし、これらはいくまでも原作で

はなく翻訳である、移植であって種まきではないという制限つきで言えることだが。比嘉春潮もこの雑誌で沖縄方言の問題を論じた。

この時期の大島はまた『唯物論研究』の協力者でもあった。この雑誌に毎月ついていたエスペラント文はかれの手になった。しかし、大島のペンネーム高木弘による唯物論全書の『言語学』は、その大部分が当時執行猶予中か、保釈中かであった伊東三郎の仕事であった。

大島を中心とするグループのもうひとつの仕事は、『エスペラント文学』というこれも謄写印刷の雑誌の発行であった。『国際語研究』では演出者兼主演者であった大島は、この舞台にはほとんど現われず、もっぱら演出者、あるいは舞台回しに終始した。一九三二年の日本エスペラント大会のとき発足した日本エスペラント文芸協会の機関誌であるが、この協会は発起人として露木清彦・三宅史平・下村芳司。主なる会員として名をあげられているのは、大島・岡一太・長谷川テル・大崎和夫・中垣虎児郎（以上ポエウ系）、宍戸圭一・多羅尾一郎・青島友美・松葉菊延・守随一・平岡昇である。このうち、露木は『日本刀剣鑑』なる武士道精神をたたえた本を書き、東洋文化研究所なるものを作ることになる、反動と言えなくとも保守色濃厚の人。下村はすでに人の道教団（今日のPL教団）に係っていた人で、その前には後藤静香の希望社のエスペラント部門で働いていた。宍戸はのちに「愛国行進曲」をエスペラント訳した京都大学の先生。平岡昇はこの時期以後エスペラントから離れる今日のフランス文学者である。

岡一太はこの雑誌に、先年「人生案内」の題で発行された児童文学（？）の原形をエスペラントで



『国際語研究』と『エスペラント文学』

書いた。そして「朝やけ」という小説を書き、フランスで単行本になることに決まったが、ナチスの侵攻で関係者が逮捕されてオジャンになった。中垣虎児郎は「エスペラント翻訳実験室」という試みを連載し、エスペラント文学の経験主義的研究の道を開いた。これはのちに日本エスペラント学会から単行本として発行され、後進に大きな展望を与える。長谷川テルや万沢まき（のちスエーデン文学者）は原作小説を発表し、三宅史平は訳詩を試み、米村健も小説を書いた。大島自身のこの分野での仕事は、張赫宙の『追われる人びと』の翻訳であった。現在野口赫宙の名で変節作家として知られる張は、朝鮮人民の圧迫される姿を書いて⁽¹⁶⁾いた。この雑誌のこうした幅広い活動は、たしかに一部の急進的な人びとの反感をつのらせた。栗栖継がイチヤモンをつけ、中垣にたしなめられたこともある。

三六年五月に二〇号を出したところで、会員

の兄が参謀本部にいて、その方面からの警告もあって、この雑誌は自発的に廃刊した。同じ年の七月に『国際語研究』も、言語運動を特集した一六号で廃刊した。いずれも社会情勢のあわただしい転回に発行の困難を予測したからであった。

死を賭した人びと——斉藤秀一らのこと

エスペ란ントの発展は、国語そのもの、また文字の改革、とくにローマ字化をとまなわないうかぎり意味がない、国際語の発達は、国語の純化と文字改革に併行すべきである、こう考えて動きだしたのは、山形県鶴岡、あのワッパ一揆の闘争の伝統を持った地にいた斉藤秀一であった。

「斉藤は山形県鶴岡市の南方約一二キロにある山添村（現在の櫛引町）の泉流寺に生まれた。駒沢大学東洋文学部を一九三一年に卒業すると、すぐ故郷にもどり、さらに山奥である隣村の大泉小学校准訓導になって、大平分校、八久和分校で学童を教えた。分校はいずれも大変な辺地で、大平部落はバス道路から一時間も山を登ったところにある。八久和は現在、ダムによって湖底に沈んだ」と、実地に踏査した朝比賀昇は伝えている。⁽¹⁷⁾

このあと、斉藤は東北大学庶務課の雇員をしていた。大泉ローマ字会を作ったり、プロレタリア作家同盟山形支部準備会に関係し、さらに『赤旗』や『無産青年』の配布をして起訴猶予処分になった。一九三四年九月から三八年五月にかけて、同じようなミニコミ雑誌『文字と言語』を一三号発行し



一 斉藤 秀

姿を消した）をモデルとして、レニングラード東方学院の言語学者ドラグノフ教授の援助のもとに考案されたシステムであって、蔣政権下のウェード式と相当ちがっている。日本式とヘボン式のように、英語の発音により多く重点をおく方向と、その国語にもっともふさわしい表記法を考える方向との差である。このローマ字化の思想は、毛沢東の『新民主主義論』でも支持されているが、現在の人民中国における文字改革運動の出発点になったものであった。

一九三一年から三八年の七年間に、斉藤は庄内方

た。これには黒滝チカラ・東条操・石黒修・タカクラハテル・平井昌夫（『戦旗』から『唯物論研究』にかけてのペンネームは、頼阿佐夫）・大島義夫・鬼頭礼三などが寄稿した。ミニコミとはいえ、執筆者の顔ぶれに関するかぎりでは一流雑誌に近いものである。さらに、中国のラテン化運動（ローマ字運動）と連絡をとり、現在も文字改革運動を進めているエスペランチストの葉籟士の『支那字ローマ字化概説』、その他、魯迅・黄郁・景輝・之光らの論文を翻訳編集して『支那語ローマ字の理論』という謄写印刷の本にまとめて各地へ配布した。もともと中国のローマ字運動というのは、一九二七年の大革命に失敗してソ同盟へ亡命した瞿秋白（のち中国共産党書記長で魯迅の親友。国民党によって銃殺された）・呉玉章・林伯渠・蕭三などが、ソ同盟のローマ字運動（詳しくはわからぬが、これまたスターリン政権下で

言に関する論文約三〇点、ローマ字教育についての論文約二〇点を書いたと言う。これらは『国際語研究』『ローマ字世界』『ローマ字の日本』『エスベラント』『サルートン』『明日のために』、それに中国文学研究会の『中国文学』、さらに海を越えて上海の『ラ・モンド』などに掲載された。

斉藤の「罪状」に数えられているの中には、さらに魯迅・沈静之・徐沫・葉籟士・ドレーゼンなどとの文通もあった。斉藤はこれらの人とともに、あるいはその賛同のもとに、「無産階級解放運動の一翼として革命的ローマ字運動」を企て、国際ローマ字クラブを組織して、一九三七年六月より三八年三月の間に、加藤隆通や、大阪の印刷労働者吹田好雄らと機関誌 *Latinigo* (『ローマ字化』) を発行し、諸方面に配布した。斉藤の事件により取調べを受けた者の中には、現東北大学教授喜安善市、元神戸外大教授眞名美隆、熱心なカナモジ主義者でもある小久保寛三、大島義夫らのエスベランチストがふくまれていた。小久保はこの事件による留置場生活のショックで、釈放後間もなく死んだ。タカラ・テルも斉藤の事件からアシがついて検挙された。タカラが警視庁を脱走して三木清の助けを求めたことから、やがて三木の獄死という悲惨な事件をひき起こしたのはつぎの検挙のときである。

以上が検察当局が語る斉藤の治安維持法違反の容疑事実である。国分一太郎の小説『オトリの辞書』や石川達三の『人間の壁』には、斉藤をモデルにした人物が出ている。

大島たちのグループを除く以上の団体はことごとく「コミンテルンと日本共産党の目的達成に協力する」ものとして検挙された。

一九三六年十一月以降 マルシュ

同年十二月以降 サルートン、ポポーロ、フラート、マリーヨ、京都プロ・エス研究会、北勢エス連盟
一九三八年十一月 エス文学友の会、文字と言語

犠牲者のうち、宝木寛・佐藤時郎・中塚吉次・斉藤秀一らは、拷問のための発病、または病勢昂進で、執行停止中に死んだ。阪上睦郎は大阪商大事件というフレイム・アップにひっかけられ、大阪の未決監で死んだ。大部分のものは一審、または二審で執行猶予になったが、前歴のある角野貞一・久山専一郎・細川三西・米村健・市原梅喜らは、懲役二年ないし四年の実刑をまぬかれることができなかった。

ディミトロフ報告のエピソード

エスベラント運動と人民戦線運動について、もうひとつ書かねばならぬことがある。コミンテルン第七回大会のディミトロフ演説のことである。これは社会民主主義者を主要な敵に数えるマヌイルスキエー流の社会ファシズム論を清算し、「下からの統一戦線」ばかりを考えるのではなく、社会民主主義者や自由主義者と「上から」も協力することによって、ファシズムの危機と戦うことを主張した画期的なものであるが、この報告はいろんな形で日本へ持ちこまれた。

まず警視庁訳があったらしい。これは筆者にとっては未見の資料である。

次に、大阪の再建委員会から出たものがある。これが前述のように山辺健太郎が訳したものかどうかう

かは、たしかめていないのでわからない。

それに、野坂参三たちが「国際通信」の形で持ちこんだものがある。これはアメリカから日本国内の社会主義団体あてに、相当メクラメッポウに郵送されてきた。三十七年七月には、春日庄次郎たちの日本共産主義者団がこれを復刻している。(書き忘れたが、このとき検挙されて獄死した春日の妻、安賀君子は、その兄であり労働党の書記をしていた「新人会卒業」の秀三とともに、エスベランチストであった)

この報告のエスベラント訳が日本へはいったこと、名古屋のグループがその翻訳を企てたこと(おそらく完成しなかったと思う)、『マルシェ』グループが入手したことはすでに書いた。

しかし、東京で入手した河合勇吉がこれを翻訳した。河合は東大新人会卒業組で、多数派事件で検挙された人で、軍需資本家、小松製作所の社長であった河合良成の実弟である。

河合たちのグループは、この翻訳をあわててプリントにすることはしなかった。過去の経験に照らして、へたなミニコミ戦法は長期決戦には不相当という判断を下したのである。河合はこの訳文を二通作り、一通を自分が、他の一通をその親友であり、四・一六事件の大阪のオルグ松本広治に保管を託した。そして厳選した人物だけに「拝観」させていた。この間、これに関係したのは、山本喜三郎(風間丈吉時代の共産党東京市委員長で獄死したエスベランチストの詩人陀田勘助こと山本忠平の実弟)、野呂栄太郎のあとの共産党中央部の責任者山本正美の夫人橋本菊代、戦後『前衛』編集部にいた姉齒三郎たちであった。ところがこの原本を松本に見せられた伊東三郎が、さっそく無理やりに借り受けて行って、ロクに読まぬうちに検挙されてしまった。もちろん原文も押収された。松本たちが転向者だと思っていた伊東は、コミンテルン第七回大会に西川という名で出席した小林陽之助、現法政大学教授の

長谷川博、岡部隆司らとともに党再建を企ていたのである。もちろん(?)松本も検挙された。

戦後、ディミトロフ報告を佐和慶太郎が自分のやっていた人民社(雑誌『真相』を出し、「天皇はホウキである」という名文句を考えたところ)から出版すると聞いた河合が出かけて行って校正刷を見ると、まがうかたなき自分の作品であった。あれほど厳重に保管されていた翻訳のコピーが、いつのまにか作られてバラまかれていたのであった。これは、松本が保管をたのんだ武田勝子(今の小松勝子、ポエウの石内茂吉の義妹。戦後、伊藤律と行動をとにし、いまは音楽関係の翻訳などをしている小松雄一郎の妻)から岡部隆司、加藤定吉、作家山代巴の夫山代吉宗らのいわゆる京浜グループの手に渡り、ここでプリントされたものらしい。この翻訳の合法的出版は占領軍の手で妨害されて、神山茂夫の序文をつけて共産党中央委員会から「党内資料」として印刷された。今では稀覯本に属する。ソフィアのディミトロフ博物館には宮本が寄贈した一本があるはずだ。⁽¹⁹⁾

中国人留学生のこと——運動の終焉へ

中垣虎児郎はもう少しちがった形で検挙された。

一九三七年、ポエウの中心からいつの間にかはずれてしまった中垣は、「中国人の留学生の中にエスベラントを学びたがっている者がいて、学会に講習を依頼してきたので、その一部を私が引き取った。初等講習を一回、やや進んだものために中等講習を一回やったが、なお進みたい希望者は私の

家へ来させて個人教授をすることにした。こうして一〇人ばかりのものが、あるいは一人二人、あるいは四、五人組んで私の家へ来るようになった。その時、私は柏木から高円寺一丁目に移っていた。ところがあるとき、杉並署の巡査の案内で警視庁の支那係の八杉警部補と名乗るものが私の家へやってきた。『聞きたいことがあるので杉並署まで来てほしい』という……

こうして私は杉並署に半年いてボエウ以来のことをきかれ、検事の取調をうけ、治安維持法違反として起訴され、結局執行猶予になった……⁽²⁰⁾

このとき中垣にエスベラントを学んだのは、鄧克強(丁克)・葉君健・黄一環・陳秋煥・李益三などで、七月十四日に上海で開かれる中華世界語者協会の大会に、在日中国人エスベラントを代表して鄧が出席しようとして連絡したことからアシがついたのであった。このうち英語教師をしていた葉君健は、今中国作家連盟の働き手となっており、先年日本を訪問した。エスベラントで『忘れられた人びと』という小説集を出しているが、なんでもクヌート・ハムスの書くような貧乏小説であったと記憶する。黄は、孫文と併称された中国ブルジョア革命の先駆者、国民党右派の指導者、黄興の子である。

この中垣の研究会で『プロ・エス講座』や中国で出していたエスベラントの抗日雑誌Cinno Hurlas『中国は吼える』をテキストにしていたという口実であるが、さすがの当局もこれだけでは起訴できないとして、ボエウ以来の活動を洗いたて、その上、中垣の下宿で開かれたボエウの中央委員会が、「佐野学・鍋山貞親の転向は党を裏切り帝国主義に身売りしたものだ」という当時の書記長樋口幸吉が起草した声明書を可決した会議に、中垣が出席したとして治安維持法にひっかけようとしたのである。

中垣に言わせると、狭い一室だけの下宿を提供したため、他に行きどころがなくてすわっていただけなのだが。こっけいなことは、この起訴状には主任検事として古橋浦四郎という名が出ているが、実際に法廷で論告にあたった堀真道は実は日本エスベラント学会の理事のひとりであった。もとより進歩的と言えるような人物ではなく、取調べにあたって竹刀を部屋へ持ちこんだような鬼検事として聞こえた人であるが、さすがにこうしたデッチあげで仲間を投獄するに忍びず、治安維持法違反としては空前の、執行猶予つきの求刑をした、と中垣自身が語っていた。

中垣に学んだ中国人の多くは、いま人民中国でそれぞれ相当の地位にあり、中垣が視力を弱め、国民救済会が作った沼津の解放運動老人ホームで歌人の渡辺順三や、その昔渡辺政之輔の下で関東木材労働組合の働き手であった稲垣佐太郎の世話になっていたとき、中垣を中国で療養させようと努力した、という話が伝わっている。

大島もまた検挙された。一九三八年、唯物論研究会関係者が検挙されたあと、斉藤秀一が検挙されるや、それをきっかけにかれと関係のあった国語運動・ローマ字運動・エスベラント運動関係の活動分子数十名が全国的に検挙され、「左翼言語運動事件」がつくりあげられ、大島もそれにふくまれた。この事件で起訴されたのは、国語運動のタカラ・テル、黒滝成至、ローマ字運動の平井昌夫、エスベラント運動の大島であった。

こうして日本の国からプロレタリアと名のつくエスベラント運動は姿を消した。そのあとに來たものは、中立的、ブルジョアの運動そのものの窒息であった。中垣の検挙のあと、わずか二年後のこと

であった。エスベラント報国同盟を作っても、愛国百人一首や参謀将校のマライ戦記の翻訳などを
せてみても、日本エスベラント学会の機関誌は「雑誌統合」の名で休刊せねばならなかった。そうし
て、この種の組織にとっては、機関誌だけが唯一の組織媒体であった。

根こそぎの迫害——ソ同盟とドイツで

ここで目を転じて海外の運動をのぞいてみよう。

「労働者農民の祖国」はすでに変質していたのである。一国社会主義建設の可能性の問題をめぐつ
て、トロツキー、それにかつては日本をひそかに訪れたこともあり、また日本共産党の二七年テーゼ
の起草者でもあるブハーリンなどは「失脚」していた。戦後、スターリン主義と呼ばれることになる
怪物が、このプロレタリアートの「ディクタツラ」の国の中枢深くを食い荒らして、そのプロ
レタリア国際主義なるものは、各国共産党をソ同盟の第五列的な存在だけにとどめ、世界革命の可能
性を追求する熱意は放棄されていた。日本労働者階級の子、「われらの山懸」ことプロフィンテルン
執行委員山本懸蔵、約束された東大助教授のイスを投げすててコミンテルンと日本共産党の連絡に努
め、『共産主義左翼小児病』を訳した「人民の名医」国崎定洞、「日本共産党の指令を受けて」雪の樺
太国境を越えた杉本良吉らが、一点の疑いをも持たず、ひたすらそのために働いた「共産主義」の名
によって投獄され死んでいったのであった。山形生まれの労働者伊藤政之助について「保釈出所中、

昭和五年七月入露、ウラジオストックにいたり、海員クラブおよび『トス』日本部責任者として昭和
八年まで活動したるが、出獄理由明確ならずとして左遷され、目下モスクワ某印刷所にて職工として
稼働のよう⁽²²⁾と当局が調べあげたが、この人もついに行くえ不明である。たしか共産青年同盟関係
の被告であったと記憶する。牢獄以外に待ち受けるはずのない日本ヘトコトコ帰ってきた日本新劇運
動の先駆者、「赤い伯爵」土方与志のナゾもここにあった。盲目的に忠実な土方は、戦後発表した手
記「ナスの夜ばなし」にもついにこのことに触れていなかったと思うが。日本からの代表派遣に失敗
したボエウを代理してイーペ大会に出席したと何かの文書に書かれている勝本清一郎の帰国、佐野碩
のモスクワからメキシコへの逃避、野坂参三の中国潜入も、この「労働者農民の祖国」の変質と無関
係でないはずである。かれらがついに何ひとつ言わない、または言わなかったのは、本節の筆者宮本
より、かれらが利口者であるからだだけだ。

「好ましからざる人物」としてソ同盟並局に逮捕された八五〇万⁽²³⁾の人びとは次の範ちゅうに属して
いた。

一 元トロツキー、ジノビエフ、およびブハーリン反対派全員

二 すべての古いボルシェビキ一般

三 すべての元赤色バルチザン

四 元メンシェビキ、社会革命党员、無政府主義者、ユダヤ人社会民主党員、およびその他いっさい
の革命的左翼政党员

五 外国に暮らして自身の体験により、戦前の時代を知っているいっさいの人びと。および外国居住

の友人や親族を持ち、かれらと文通しているいっさいの人びと。切手収集家やエスペランチスト
六 ソヴェート同盟に帰還した元の亡命政治家、および、かつて使命を帯びて外国に派遣されたいっ
さいの人びと

七 ソヴェート同盟に在るいっさいの外国共産黨員

八 外国勤務の軍事秘密情報機関員、およびゲー・ペー・ウーのすべての在外勤務員

九 少数民族の人びと

一〇 宗教信者

一一 除名された旧黨員の全部

一二 かつてソヴェート政權の手で不当な扱いをうけたすべての人びと

一三 いろいろな反対派指導者の親族

一四 スターリンの保護を受けずに、独自に人民の間で人気を持ち、影響力を持った者全部——たと

えば赤軍のトハチエフスキー、ヤキルの両將軍のような人びと

一五 モスクワ裁判や大粛清そのものの残虐に恐怖して、独裁者を抑制しようとした党内の最高幹部

一六 モスクワ裁判や大粛清そのものを組織したゲー・ペー・ウーのメンバー

以上がドイツ・オーストリア両国共産党の黨籍を持ち、「粛清」の犠牲者として逮捕された、すぐれた物理学者アレキサンダー・ワイスベルグが後になって伝えるところのスターリンからゲー・ペー・ウーの長官イエジヨフへの指示である⁽²⁴⁾。もとより、わたしたちはワイスベルグの証言の真否を確かめることはできぬが、エスペランチストに対する迫害から推察するかぎり、この分析に賛成するは

かはない。

革命以来二十年の歳月を経て、社会主義建設を世界に誇ったわが「労働者農民の祖国」が、その国の人民が直接外国の人民と接触することを恐れなければならぬとは悲劇以外の何ものでもない。反対に、堂々と胸をはって社会主義の成果を人民間の交流によって誇示し、そのことによって資本主義国家の人民を啓蒙すべきだ、と考えるわれわれが素朴すぎるのであろうか。人民と人民の交流を、おきまりの「スパイ」と「コスモポリタニズム」で押さえつけねばならぬとは、奇怪きわまるスターリンの社会主義であった。ソ同盟エスペラント運動の指導者のひとりムラフキンは、「流刑の間にスターリンはエスペラントを学んだ」と言っており、たしかトロツキーも、「かれは語学的才能がないから、やさしいエスペラントを学んだ」と書いていたように記憶するが、このことはスターリンがエスペラント運動を弾圧するためのさまたげにはならなかった。これが本当だとすれば、スターリンのエスペラント学習は、黒板勝美の警視庁での講習以来、日本でもしばしばあった警察官、はては本書にしばしば引用した竹内次郎検事の学習と同じことであった。

弾圧は一九三五年のソエウ（ソ同盟エスペラント同盟）の中央委員スネジコの検挙からはじまった。つづいてソエウの書記長、赤軍の元士官、カリーニンの元秘書、フォクス（対外文化連絡協会）の幹部のドレーゼン、ドイツ留学の経歴のあるムラフキン、文芸評論家で『エフゲニー・オネーギン』のエスベラント訳者ネクラソフ、流産したエスペラント訳『レーニン全集』の宣伝用シールの図案を書いたデザイナーのグロフ、今もって世界エスペラント界最高の詩人のひとりであるミハルスキ、ハンガリー・ソヴェート共和国の指導者の子、亡命者ロビチェクとその友バツタ、『国家と革命』のみこ

となエスベラント訳をやりとげたデミジュク、「デ・ミトロフ報告」のエスベラント訳者コルチンスキー、ウクライナの詩人クズミチ……ソエウの中央委員会はひとり残らず検挙され、地方活動家も全部、平会員すら片っぱしからやられた。

かれ自身相当官僚風を吹かして党の権威をふりかざして反対意見の持主、たとえばデミジュクなどをやりこめていたらしいドレーゼンが、自らのたのむ権力の手で銃殺されたのは一九三七年のことである。中央委員の大部分は、あるいは銃殺され、あるいはラーゲリへ送られた。幸いにも留置場生活だけで助かった者も、党からの除名、公職追放、親族からの義絶……かろうじてラーゲリ生活の中で生き残って、のちにレーニンをしばしば演じた俳優のエスベランチスト、リチコフは数年前イギリスへ亡命したあとで、三万のエスベランチストが逮捕されたと言う。ドイツ民主共和国のエスベランチストたちの計算では二〇〇〇人が死んだとか。そしてソエウの公式発表によると一九三五年の会員は五一一人であった。宇宙飛行士ゲルマン・チトフの父、ステパン・チトフは、一九六一年、いわゆる雪どけのあとでさえ、エスベランチストであったことを外国の雑誌に書かれてひどく恐れていたと言う。生き残ったソエウの中央委員でエスベラント運動に復帰したのは、わずかに二名である。『国家と革命』の再版を出した大阪のエスベランチストに連絡することによって、はじめてその生存を世界に知られたデミジュクのごときは、送られた自著を受け取った返事を書くことすら恐れている。

これが、わがボエウが全力をあげて守ろうとした「労働者農民の祖国」の実体であり、スターリン主義なる大国主義の、内なる人民に見せた怪物の素顔であった。

プロレタリア・エスベラント運動のもうひとつの支柱、ドイツ労働者エスベラント協会を待ち受けていた運命は、一九二五年、ヒトラーが全人類に対する「わが闘争」を宣言したときから予告されていた。それは、ユダヤ人の世界征服陰謀なるものと、ユダヤ人ザメンホフに考案されたエスベラントを結びつける、世にも卑劣なものであった。

一九三三年五月、ヒトラーの政権奪取と時を同じくして、共産党系のドイツ労働者エスベラント協会、社会民主党系の社会主義エスベラント協会が弾圧され、ドイツ・エスベラント運動の四分の三が潰滅した。生き残ったブルジョア的ドイツ・エスベラント協会は、その日本の同僚と同じように、あの手この手でナチズムの氣にいるように努め、あげくのはてにはゲシュタポへの協力を誓ったりしたが、同じ運命をまぬかれなかった。一九三六年、悪名高い警視總監ヒムラーによって「一九三六年七月十五日を期限として、人工語のためにするあらゆるグループとその下部組織を自発的に解散せよ」という勅告をつきつけられたのであった。⁽²⁷⁾

ナチ占領下の諸国における弾圧は言うまでもない。オーストリア・ハンガリー・オランダ・ポーランド・フランス……そして日本と同じように、初期にはエスベラントによる対外宣伝放送をしていたムッソリーニのイタリアでも。悲惨きわまる事実として、ザメンホフ一族が嫁と孫を除いてワルシャワその他のラーゲリの中で、ガス室、またはその他の方法で虐殺されたことをあげねばならぬ。もとよりナチス・ファッショは、エスベランチスト狩りにおいてスターリンにおくれをとったはずはない。

しかし、こうした弾圧に対するエスベランチストの抵抗については、部分的、エピソード的な記録以外にまとまった研究はされていないようである。リンスの詳細な研究『第三帝国のエスベラント』⁽²⁸⁾

も『危険な言語』も弾圧に関する記録だけは克明であるが、抵抗に関する研究を欠いている。わが日本の労働運動史研究者の大部分をおかしている文献第一主義のせいではなからうか。

あらゆるエスペランチストがごとくオモオメ収容所へたたきこまれたはずはない。日本におけると同じように、抵抗はもはやエスペラント運動、文化運動の形態にとどまらず、より直接的な政治運動の形をとったではなからうか。日本とちがったことは、地つづきに人民戦線の国フランス、スペイン、「労働者の祖国」ソヴェート同盟があったことだ。収容所入りの運命をまぬがれたドイツ・イタリアの革命的エスペランチストは、あるいはソ同盟へ亡命し（²⁹）ここの運命はすでに書いた）、または銃を手にしてスペインで戦ったであろう。オーストリアの前大統領、故フランツ・ヨナスは収容所生き残りのエスペランチスト、しかも相当巧みに話し、かつ運動に従事した人である。

ライプチヒにあったエクレーロ（革命的エスペラント文献出版協同組合——事実上のイーベの出版部）も三年三月十四日、ナチスにふみにじられて、活動の本拠をアムステルダムへ移転しなければならなかった。「鎖国」状態のソ同盟で活動できないイーベは、事実上その国際的活動のほとんど全部をドイツの同志たちに負っていたのだが、同じようにアムステルダムへ移る。それもしばしの間である。やがてヒトラーの進撃とともにアムステルダムを追われる。そして一九三八年には「エスペラント運動統一のために」今まで「ブルジョア的」と排撃していた世界エスペラント協会への各個加入を訴えて解散してしまう。

サートの方も無事にはすまなかった。ヒトラーのフランス侵攻、パリ占領はこの運動をも粉碎した。ロッテルダムの同志たちに業務を委託したが、ドイツ人である書記長バルテルメスは、その国籍のた

めに一時は無難だったが、やがて一九四二年には北フランスで逮捕された。

一度だけイーベとサートの統一戦線が問題になったことがある。一九三六年、マンチエスターのサート大会のときであった。イーベの中心人物のひとりであり、イギリス左翼エスペラント運動の指導者キーブルが、とくに発言を許されて、統一戦線の結成を呼びかけたが、参加者の多数派はこれを拒否してしまつて、ついに統一戦線は実現しなかった。ドレーゼン以下の過去の行動がたたつたものであろう。³⁰

解放の担い手、中国のエスペラント運動

しかし中国での様相はまったく違った。もともとこの国では、ブルジョア的、国民党的エスペラント運動はほとんどなかった。民族独立を至上命令とするこの国の民主主義運動は、その担い手を腐敗した土豪劣紳に持たず、プロレタリアートの党、中国共産党に見いだしていた。百パーセントと言えは過言であらうが、中国のエスペランチストの圧倒的大部分は反体制派に属していた。抗日統一戦線の結成とともに、かれらもそのために結集した。この国の文化運動と同時に発足したエスペラント運動も、早くは銭玄同・魯迅、少しおくれで巴金などの進歩的文化人がその先駆者であり、国民党宣伝部の中心にすわった郭沫若もこの運動に好意を持っていた。

一九三九年、延安の洞窟の中で、毛沢東は言っている。「エスペラントを本当に国際主義的な思想、

本当に革命的な思想の担い手にする形式として考えるならば、それを学習し得るし、また学習すべきである」と、多分に党本位、革命運動本位の立場から支持していた。このコトバのとおり、あるいはそれに若干の抵抗を感じながらも、中国のエスベランチストたちは、上海に、重慶に、武漢に、香港に、延安に、抗日戦の尖兵として活動した。「中国の解放のためエスベラントで」はこの国のあらゆるエスベラント雑誌は相ついで発行され、日本国内にも送りこまれてきた。中国を中継地とするスペイン人民戦線の文書も同様であった。そして日本のミニコミ雑誌を通じて、人民戦線結成を呼びかけるための小さい働きをしたのである。筆者たちもこの仕事に加わっていたことを、今もなお誇りとして

注

- 1 袴田里見『党と共に歩んで』一九七〇年 新日本出版社。
- 2 竹内次郎「プロレタリアエスベラント運動に付て」『思想研究資料』特集第六十九号 一九三九年 司法省刑事局。復刻版 一九七二年 エスベラント運動史研究会、および、高桑末秀『日本学生社会運動史』一九五五年 青木書店。
- 3 岩村登志夫『日本人民戦線運動史序説』一九七一年 校倉書房。
- 4 竹内次郎 前掲書、および、Maršu 一九三五年三・四月合併号 マルシュ社。復刻版 一九五七年『マルシュ』刊行会。
- 5 竹内次郎 前掲書。
- 6 同右。
- 7 久留島義忠「人民戦線運動の回顧」『兵庫県党のあゆみ』一九七二年 日本共産党兵庫県委員会。
- 8 栗栖継「"La dangera lingvo" を読んで思ったこと」Nova Rondo 第二五号 一九七三年六月、および、栗栖継「長

- い友情の終り」『北方文芸』一九七三年八月号 北方文芸刊行会。
- 9 石垣綾子『さらばわがアメリカ』一九七二年 三省堂、その他。
- 10 竹内次郎 前掲書、平出禾 前掲書。
- 11 竹内次郎 前掲書。
- 12 同右。
- 13 内務省警保局『社会運動の状況 一二』昭和十五年。復刻版 一九七二年 三一書房。
- 14 平出禾 前掲書。
- 15 内務省警保局『社会運動の状況 七』昭和十年。復刻版 一九七一年 三一書房。
- 16 三宅史平・大島義夫・岡一太・朝比賀昇「座談会『エスベラント文学』のころ」Nova Rondo 第二〇号 一九七一年九月。
- 17 大島義夫「東北の暗い谷間に消えた星」Nova Rondo 第四号 一九六六年六月。朝比賀昇「斉藤秀一」La Movado 一九七〇年一〇月号、同「斉藤秀一」の位置づけ」La Revuo Orienta 一九七二年六月号。
- 18 竹内次郎 前掲書。
- 19 宮本正男「ディミトロフ演説とエスベラント」Nova Rondo 第二一号 一九七二年一月。松本広治『信念の経営』一九七二年 東洋経済新報社。
- 20 中垣虎児郎「ボ・エ・ウのころ」『文学』一九六四年十月号 岩波書店。
- 21 風間文吉『モスコウとつながる日本共産党の歴史』
- 22 15と同じ。文中の略語らしい「トス」については知らない。ご教示をいただければ幸いです。
- 23 Robert Conquest: The Great Terror. Stalin's Purge of the Thirties. Toronto, 1968. ユニバーシティ・オブ・トロントの『報告』の菊池昌典の解説から。
- 24 A. ワイスベルグ著、荒畑寒村抄訳『報告』一九五三年 早川書房。再版 一九七二年 新泉社。
- 25 Kongreso de Revoluciaj Esperantistoj (革命的エスベラント大会) 1921. Amsterdam-Berlin. 27と同様リンスの本からの孫引き。
- 26 サートとイーベの分裂当時、サート派の機関紙にこうした記事が出た。いま原本を探すのはむづかしいが、この記憶は

第八章 自由主義者も相ついで



W.R.I. の機関誌『ラ・ミルトレジスタント』(1936年)

- 絶対に正確である。
- 27 Ulrich Lins : La dangera lingvo (『危険な言語』) 1973, L'omnibuso, Kioto.
- 28 Ulrich Lins : Esperanto dum la Tria Regno (『第三帝国と Esperanto』) Semacica Revuo, SAT, 1968, Paris.
- 29 数年前日本を訪れたハンス・マルテンスという労働者は、この国際旅団の参加者であって、その経験を語ってくれた。
- ドイツ共産党員としてスペインで戦ったこの人は、その後スエーデンに亡命して社会民主党員になっている。
- 80 SAT : Historio de SAT (『サートの歴史』) 1963, Paris.